

奥州安達原 環の宮明御殿の段

四代 竹本越路大夫／記

高木浩志／談

〈出典：『四代越路大夫の表現—文楽鑑賞の手引き—』淡交社、平成14年6月〉

三段目ですから、まあ五本の調子が普通です。六本や六本半といった高い調子ではやりません。従って、それに見合う声修業が出来ていないと、高い細い声では、この枕まくらにうつりません。雪空であり冬の風であり、それが身にこたえる、心の闇というわけですから、沈痛な雰囲気を出すのにふさわしくないのです。

はじめの「たださへ曇る雪空に」はハルフシですが、『佐太村』の「春先は」のように、はんなり伸びやかに、顎をあげて言うハルフシじゃないです。顎を下げて声を押さえて、低く寒々しく陰鬱に言います。同じ音程でもね、顎の位置で、お客に与える雰囲気は全然違うものですよ。「雪空に」の「に」の音程を、さらに下げる人もありました。「心の闇の暮近く」以下も、引き締めて。

「身に徹こたゆるは」は、大夫も無意識に脇を締めてますね。寒さと心情をそれらしく言いますが、この辺から袖萩そではぎの気持ちになってます。「血筋の縁」のあとの谷の手、チンチンリンチンチンチン・チチチンチンチン・チンチンチン、雪の中を、継ぎはぎちりめんの縮緬きつげの着付で、目を泣き潰した袖萩そではぎが、杖を頼りに歩いてくる足取りになってます。すっすっとは歩けないから、そうは弾かない。足取りを弾くじょう、情を弾く、二代喜左衛門師匠が最高でした。それを受けて、「不便ふびんやお袖はとほとほと」から袖萩です。ここの三味線のあしらいも同じこと。

「親だいじの大事と聞くつらさ」、「つらさ」は、意味する通りの心を込めて言います。突然この一言だけそうするのではなく、「聞くウウ」の産字うみじから、気持ちを込めていきます。「娘お君に手を引かれ、親は子を杖、子は親を」、三味線はややはずんだ感じもあるが、大夫はずっと低い音おんです。三味線はやや急ぎまして、「走らんとすれど」。大夫は「走らんと」はちょっと詰めて言いますが、「すれど」はゆっくり、つまり心では急いでも、実際は早くなんか歩けない感じの表現。「雪道に」は少し高く。「力なくなくと泣くの意味。「辿り来て」でフシ落ち。

「アア嬉しや」と「アア」は息で言う感じ、「嬉しや」はイロ。コトバで「誰も見み替とがめはせなんだの」ですが、この袖萩は、流浪しているうちに目を泣き潰したのであって、産まれながらではないから、絶えず耳を向けて言うたり聞いたりするような、特有の表現はしませんね。人形は、『宿屋』の朝顔でもそうしてる様だが。

袖萩は二十六歳位、お君は間もなく年が明けると十一歳です。お君は、「イイエもんぐち門口もんぐちに侍衆さむらいしゆうが」と言いますが、山城少掾やまぎのししゆうは、こうした女の子の表現に際しては、口を横に延ばして、鼻へ抜いて言われました。二代竹本津太夫はうぜんじのししゆうがそうだったらしい。それらしく聞こえます。僕も自然にそうして言うてました。音おんも要ります。

袖萩は、コトバで、父直方が環の宮の明御殿に居ると聞いて、ようようここまで来たと言います。「来たけれど」はカカルで、「御勘当の父上母様」以下、文章は詞ですが、地イロになってまして、早い運び。中では「浅ましい」は、意味通りをコトバの感じで言います。「お目にかかって御難儀の」はゆっくり、「様子がどうぞ聞きたや」と又早く。文意通りの緩急といえます。

ト書きの「さぐればさはるウー小柴垣」とイロになるところは、目の不自由な袖萩の、探る動作がわかるように。すつと言う「さぐればさはる」ではありません。「こ・こ・は・」も同じく探る動作です。やつとわかって「お庭先の枝折門」を、ようやく来たというそれなりの感慨がありますからウレヒに掛けて言うて、息を引いて、ここはお客に息が聞こえても良い所、というより聞かすべき所。引く息を利用して、その感慨を中断さず、に、「戸を叩くにも叩かれぬ不孝の報ひ」となります。「此の垣一重が」で食いしばって「鉄の」とウレヒ。「門より高うウウウ」と高い音程で、「心から」とウレヒに掛かります。「泣く声さへも」は、「さ」が高いのですが、「声」の「え」を高く言う人もありました。別段詭っているわけでは無いので、どっちでもよろしいでしょう。

「喰ウひイ付きイ泣きイ居たアリ」と締めて泣いて、トントンまででジャンは無しに「儼仗は斯ウとも知らアズ（ツンツン）」。町人じゃないですから、すつと言わないイロで、直方の格とか人物を示します。「垣の外面に誰やら人声」は、独り言的に。高く口調を変えて「アレ女共はをらぬか」と呼び掛けます。

袖萩にきちんと変わって、「外には夫となつかしさ」。「おほふ袖萩」は懸詞ですから、「おほふ」で切らずに、「おほふ袖エ萩」。変わって「知らぬ父（チチン）開けて〇悔り戸をびっしり」。続けては言いません。意外な表情の間です。

高く「何の御用と腰元ども」。三味線のテンポは浜夕の足取りに変わって、「浜ゆふも庭に立出で」。浜夕は、何も知らぬのですから、何でもなしにさり気なく「儼仗殿何ぞいの」です。ことさら不審そうに言うべきではありません。「アイヤ〇何でもない〇見苦しいやつがうせをって」と、少し戸惑いはするが、直方らしく手強く言って、「アレ腰元ども追出せ」と命じる。浜夕の「よくよくすかせば」は、素浄瑠璃でも動作が見えるような言い方。「娘の袖萩〇はつとあきれて又ばったり（チチン）」、見つけて驚く間が要ります。「ばったり」は、動作と浜夕の表情も意識して。チチンの重ね撥は、滑らかに弾きたいとこです。

袖萩、「母様か・とも得もいはず」は、万感を込めて。また浜夕、「胸一ばいに塞がる思、押しさげエエ押しさげエ」、一回目の「押しさげ」の産字からウレヒに掛けてきて、ウレヒで「定めない世といひながら、テモ扱も・扱も扱も思ひがけもない」と、最初の「さても」を掛けて言うて、「さてもさても」は、心を伴って。直方が「コレコレばば〇なにいやる」と低い声でたしなめるのは、そばに腰元が居るのを意識した間と言い方です。事情を知られたくないわけです。

浜夕とて同じで、「イヤさあ〇やっぱり犬で〇ござんした」と、心と違うことを言いま

すから、三味線の泣きの手も大きくは弾きませんよ。あしらい程度の弾き方にとどめてます。しかしそこは女親の情^{じやう}で、ウレヒで言います。だから、「親に背^{そむ}いた天罰で、目も〇潰れたなア」の言い方や、「あんまりきつい落果^{おち}てやう」の詠歎的な言い方、泣きをこらえて「今思ひしりをったか」の、息で言うように押さえた心からの叫びも、母親そのものです。腰元は、高くあくまでも物貰^{ものもら}い扱^あいします。

袖萩は「ハイハイハイ」の三つ目から泣きまじりで、「どうぞ御了簡^{ごりようけん}なされて、まっちの間」と懇願する。腰元は追い立てる。それに被せるように浜夕、「ヤレ待ってくれ女子ども」、せいでもお婆さんの口調ですよ。それで、あくまでも物貰^{ものもら}い相手として、歌を歌えと言うが、歌によそえて何か言わそうとする。まあとにかくちよつとの間でも側に置いときたい母親の情^{じやう}です。文章は詞^{ことば}ですが、「颯^{うた}ふて聞かせ」から地合^{ぢあい}になってます。

チチーン「あいとはいへど袖萩が」とハリマ。女としては低い音^{おん}で「久しぶりの母の前」。「露命^{つなふるいと}を繋ぐ古絃^{ふるいと}に」では、三味線がボテボテの音をさします。続く説明の「皮も破れし三味線の」を表現してるわけです。ここでそんな音をさしといて、あとは別段破れ三味線の音ではなく、普通に弾きますね。チチーンチンチーンの最後のチーンに被せて、コトバ「ばちも慮外^{りよがい}も顧み^{かえり}ず、願ひ申し〇奉^かる」です。「ばち」は撥と罰の懸詞^{かけことば}ですが、「奉^かる」は普通にずっと言わず、頭を下げて懇願する感じで言います。

「今の」からこの件^{くだり}の眼目の、有名な祭文です。「恥し^{さいもん}さ」は、意味通りの言い方をします。シャン シャンシャンシャンシャンシャン、合の手は皆同じ手です。高い音程で「父上や母様の」。「引きイイわかアアレエエ」と泣きまじりで。続く「泣きつぶしたる」で泣き。立て直して「目なし鳥」は「め・え・なアアしどオオリイ」と、ヒロイで、粒立てて言うようになってます。

「明^{ようよ}けて漸^{つな}う十一の、子を持って知る親の恩」と、自分の現在を訴えます。祭文には、決まった旋律があったのだろうが、歌詞は即興ですよ。袖萩が、即興で自分の境涯を言う。だからここ全体ウレヒに掛かっている、主観的に訴えます。それがこの祭文の心得と思っっています。「知らぬ祖父様祖母様を、慕^あふ（ポテン）オオオ（チチチン）オオオ一、此^{この}子がいぢらしさ（合）不便^{ふびん}と思し給はれ」でナヲス、祭文の終了です。「あと颯^{うた}ひさし、せき入る娘」とツキブシ。

孫だと聞いた浜夕は早い運びながら、「抱き入れたさすがりたさ」は女親の情^{じやう}。さっと変わって「祖父もかはらぬ逢ひたさを」ですが、立場上表面的には「尖声^{とがりこえ}」です。でも「早く畜生^{たくしだ}めを〇擲^し出して仕舞^{しま}やれさ」なんか、充分^{ほら}臆^{おそ}にウレヒを持って言います。次の「テサテ隙^{ひま}入れる程、為にならぬ」以下の直方も、全てコトバですが、同じ事が言えます。語気は鋭いが、情^{じやう}を臆^{おそ}に持って言います。「長居せば〇ぶち放さうか」と食いしぼるような言い方をするのもその表われです。結局ね、この親子三代の情愛ですよ、前半は。

袖萩「なんなんの誓文^{せいもん}、勿体^{もつたい}ない（チン）さりながら」と泣きまじり、三味線も泣きの手です。「我身ながら・愛想^{あいそ}の尽きた此^{この}体^{からだ}」もウレヒ。ずっとコトバで、「なけれども」

から、三味線無しに大夫だけでカカルです。「お命にかかる一大事と、聞いて心も心ならず」は、曲節としてはハリマ重ネ。「顔押しぬぐうて参りました」と充分ウレヒで。又コトバで、「不孝の罰で目は潰れる、此子を連れて爰の軒では追立てられ、彼處の橋ではぶち擲かるる憂目に逢ふても」と、今の身の上を、今度は祭文ではなく、自分の言葉として訴える。続く「此身の罪にくらぶればまだ〇」と、はじめの「まだ」を、掛けて言うて、すすり上げて「まだまだ業の果たし様が足らぬと」、カカルで「未来が猶しも恐ろしい」、テンで地イロ、「此上のお願ひには、娘のお君、お目見得〇と申すは慮外」、一寸止まるのは、「お目見得」なんてとても言える立場じゃないのに、娘可愛さで思わず言うて、自分で当惑する間です。あとも地イロだが、さっとした運びです。

お君も「申し旦那様奥様」と言うが、祖父様でも婆様でもなく、「お慈悲に一言」と、これが言い馴れた物乞いの口調。哀れなところですが、ここも山城少掾のままに、口を横に開いて、まあ少しべちゃっとした言い方をしてました。白湯汲みしてるんだから自然に似てしまいますね。ずっと表情も見てきたんだから。チチン「袖乞詞に」と早めて、「浜ゆふが」は、説明だがここから情を込めて、「可愛や」は、段々悲しみを加えて三回言います。「犬・猫も、産みをらず」では、「産み」が強調されない言い方をするものです。娘が、犬猫を産んだとは、さすがに言いにくい。あとは早い運びですから、「産付けざまは何事ぞ」のあとの大泣きが際立ちます。むごうは言うが、心は別です。「幾重にも」はクリ上げ。

「儻仗猶も声荒らか（ツンツン）」とイロ。「根性までが下司女め」と辱める。袖萩、「わっと泣き、下司下郎とは」、三味線無しにマカンの高い声で「お情けない」と短く泣きます。そして口早に、夫の筋目を言う。浜夕「託の種にもなれかしと思ふは母より直方が」と、直方に変わるところは「母より直」と掛けて「オ」と音を持って切らずに「方」です。「読む文体の奥の名に」はイロ止めですが、不審そうに見つめる動作で。「奥州安倍貞任とはなむ三宝」まで黙読する感じで一息で言うてしもてから、「扱は貞任と縁組みしか」と、これも心の中で言う感じです。筆跡を見比べた直方、「扱こそ同筆」はツンと同時に。ただでさえ環の宮失踪の責めを負っている平家の直方にとって、妹娘の敷妙が源氏の八幡太郎義家の北の方、武士の家名を汚した姉娘の袖萩が義家と敵対する貞任の嫁と今また判明、立場はさらに厄介になる。だから「はっとばかり当惑の」です。

気持ちを変えて「色目を見せじとずんと立ち、ヤア穢らはしい此状、弥以て〇あふ事ならぬ」、言う相手を変えて「サア奥こちへハテ・ぐづつかずと早おぢゃれ」。後で「尖い詞」と説明がありますから、そういう言い方をして、人物を浜夕に変えて「せがまれて、母も〇」と息を引いて「是非なくウ立って行行く」は、心を残してとほとほと足取りです。三味線もゆっくりトントントン。

三味線弾きさんの掛声があって、「なうコレしばし」と高い声で袖萩が呼び止めるが、両親は去っていくので、早口に「お身の難儀の其訳を、どうぞ聞かして下さいませ、申し申し」という。三味線がチチチリンチテンとあしらわれて、「伸び上がりイイイイ」。

『寺子屋』のいろは送りの前と同じ旋律で、チンチンチンチンとウレヒのツボ。四代清六師匠が鮮やかでしたね。「垣覗」は「かアアきイイのオぞオきイ」と、産字を当てる様な言い方です。

「早暮過ぐる風につれ」、ゴーンと鐘が入りますね。「頻に降る雪にイイイ」と情景描写。袖萩はなおも「去なぬ去なぬ」と絶叫します。悲しさを表すスエテで「(チチチン)聞こえぬ父と恨アみイ泣アき」です。「次第イイイイーイー次第に降り積る、寒気に肌も冷え切れれば」は、酷寒を表現をします。袖萩の身にも心にも過酷です。「かっばと転べば」まで袖萩です。「お君はうろうろ」はお君の動作で、やや早く。「ひと重を才脱いで母親に、着せエてしょんぼり白雪を、すくウーウふて口にイ含ますうれエば」の動作は、ゆっくりです。気持ちも伴います。

袖萩、「漸うに顔を上げ、アウウ」、この「アウウ」は、手負いの表現とは違うんですよ。雪を飲み込んで、それがまあ気管へ入ったとでもいうか、それを吹き出すとでもいうか、そういう感じの「アウウ」で、手負いじゃないですよ。それと、女であること、そういう声の高さや言い方を忘れずに。「オオ」と、しばらく息を整えて、「お君・もうよござる」。息で「アアア此又冷える」と耐えて、「事わいのオ」。寒くはないかとお君を案じる。襦袢だけのお君は、温かいと言う。「オオよう着て居やるか、ドレ・ドレ〇」と探る間があって、驚いて「ヒヤそなたはこりゃ裸身、着る物はどうしゃった」と、口早に聞きます。当然です、ゆっくりは言わない。お君「〇アイ〇あんまりお前が寒からうと思ふて」と、これはゆっくり、寒さに耐えながら母を気遣う言い方をします。

袖萩は「シエエ・アアア・アアア」と、食いしばって大泣きしますが、お君のコトバとの間合いが肝心です。「お前が寒からうと思ふて→アアア」とすぐ言うものでもなく、間を取り過ぎててもいかず。ここらは教えて教えられるものでもなし、自分で考えるしかないが、袖萩の心情に成りきっていれば、おのずから適切な間があるはずですよ。大夫として大事なところですよ。その気持ちのまま、マカンで「親アアなればこそオ子なればアこそオオ」、ここでお客さんにも泣いてもらわねば……。心から訴えます。理屈抜きにぶっつけます。「わしが様な不孝な者が何として、そなたの様な孝行な子を持った」は、ノリ間です。「これも因果のうちかや」は、テンポをゆるめて。「抱アきしめ抱きイしめ、泣くウ涙ア」は、人形の振りも足拍子もあるが、あんまりそれを意識せず、産字を当てるようにしないで、袖萩の心情をぶっつけます。

垣の中で聞いていた浜夕が、襦袢を投げ掛けて、「戻ならぬ世ぢゃなア」と大泣き。コトバはお婆さんの言い方。「抱きたうてならぬ初孫の」から三味線が入ります。

呼び声がするので、「アイアイそこへ参ります」と上手にちょっと高う言うて、「娘よ孫よ、もうさらば、(チチンチン)かはいの者やと」は、断腸の思いで目線を下げて垣の外へ言い、「老の足、見返り見返り奥へ行く」と心を残して。

テンテツツツテンツツツで雰囲気が変わって、宗任の足取りです。「コリヤ怖い事は無い」のあたりは声をひそめて。宗任の「傷寒で死んだはいの」は丁寧に。わが子の事を聞

いた袖萩は、「ハア」と短いが大泣き。概してコトバでのやりとりですが、「歎は理」の大きなイロに象徴されるように宗任は輪郭を大きく。口捌き良く直方の首を討てという。「エエあのとと様を」と一言だが、袖萩の驚き。

義家が、「曲者待て」と声を掛ける。宗任の「胸をすゑてどっかと座し」も大きく。「義家公、繩にはあらで真紅の糸」のあたりは、ただ説明すればよいのです。動作の「打ちかけ給ひ」のイロには、音が要ります。関所の切手を渡す義家のコトバは音に掛けて颯爽と言いますから、最後に大きく言う「日本国中を放飼」が、苦しいんです、一杯になって。だから「日ツ」で、息を盗んで「本国中をオーオ」で、折って、また息を引いて「放し飼ひ（テテン）」と、大きく言う工夫をします。宗任の「氷を」は立派に、力強い武者ヲクリで、「踏んで別れ行く」。

内で直方は義家への申し訳に切腹し、垣の外では、親不孝に加え、直方を討てと言われた袖萩が、父と夫の義理に責められて、自害する。袖萩の描写は早い運びです。直方は、手負いの息遣いで、「まだ女めは、いにをらぬか〇気づよくはいふものの、年寄ったればなんどき知れぬ、声なりともよく」食いしばって「キ聞いておけエ」と押して、あからさまではないが、父の情です。外の袖萩も、手負いの息遣いです。「親と子が」は、説明だが、きちんと直方と袖萩に言い方を分けて。

中納言則氏が出て来て、直方の切腹を見届ける。浜夕も下りてきて、娘の自害を知り、「呆れ涙にイ別ちなしインニ」と、三つユリ。

中納言則氏、実は貞任ですが、お公家さんに化けてますから、公家詞です。音で高く言いますが、中では「袖萩〇とやらんも死なずばなるまい」は、直截的には言えませんが、貞任の心として、夫婦の情愛を込めた間と言い方になります。その感情のままに「ハア健気なる最期の様子」となります。「ハア」の言い方、ね。「冠気高くしづしづと（ツン）心（ジャラン）残して立出づる」の「残し伊て」だけは、公家の様には言わず、低く扱えるような言い方をするのは、三段目だからです。三段目の一つの特徴です。「立出づる」は、元通りまた公家らしく。

帰りかける貞任、「奇しや聞ゆる鐘の音」や「太鼓の音の喧し」は、一杯に大きく言います。合もあしらいも勇壮です。「ハテふしぎや」は、まだ公家詞です。

八幡太郎義家の出。「八幡太郎是にあり」と、颯爽と口捌き良く高らかに。組子は早く。その組子を蹴飛ばした中納言「ヤアラ心得ず」はイロでも、ツン（ウン）ツンと大きなイロです。まだ公家詞だが、やや手強く「桂中納言則氏を貞任とは〇何を以て」。

義家、高く早くタテコトバです。「白旗を取出し給ひ」の動作の説明のイロを挟んでまたタテコトバ。だからこの短いイロが助かるんです。ずっと続けてタテコトバでは、高く早いので、大夫は顎が吊ってしまいます。「わが国の梅の花とは見たれども」の歌だけはゆっくり。端場での出来事が証拠だというわけです。「兄弟一致の血判に白旗をけがし」は「血ツ判」で、息をはねて盗んで一息に聞かすが、最後は「サ・サ・ササササ、ササササササなんとなんと」は、弾みをつけて勢いで言わないと、とても言えませんよ、こ

のタテコトバは。

「貞任無念の髪逆立て」から貞任。ここはもう公家ではなく貞任として、低い音程で口捌き良く「エエ口惜しやなあ」以下コトバ。公家に化けて入り込み、直方に腹を切らしたことを言い、親の敵と義家に詰め寄る。義家もコトバ。最後だけハリマで「貞心厚き袖萩が、最期の際に暇乞ひ」ですが、情けのある言い方です。

聞き覚えある声で夫貞任と気付いた、死期迫る袖萩の嘆き。六年振りの再会だのに、顔を見ることも叶わぬ。お君も「とと様（チチチン）なう」と継る。貞任の「恩愛の涙はらはらはら（ツツンツン）」と、短い情愛の山場で、義家も同情の念を示す。

山城少掾も、「はらはら」ですぐ「御大将も直垂の」にしてみました。現行の演出もそうです。院本では、義家がお君を引取り、断末魔の直方や袖萩、浜夕と貞任、敷妙も出てきて、涙ながらの別れがありますが、カットされています。そのカットした部分の代わりに、「思ひ隔つる八重垣に、落ちる涙の雪解けて、水嵩まさる如くなり」の文句を足して言う人もあったらしく、これ大落シなんです。『尼ヶ崎』の大落シの節で言えます。元々竹本座初演のもので、東風特有の大落シはどうかと思うが、いつごろ誰がカットし又補足したのか、その辺の事情は知りませんし、僕も言ったことは無いが、そんな文章が伝わっていることを、申し添えておきます。

ぱっと雰囲気が変わって、宗任が出てきますが、これはノリ間で猛々しく言います。三味線も勇壮です。それを押し止める貞任は逆にやや優美とでもいうかゆったりですが、

「梅花の赤旗、奥州に押立て押立て」からは大きく勇壮に一杯に言いますよ。宗任は「実にも尤見者人」と勇壮に。義家も早いテンポで、戦場での再会を約して、それまでは中納言としての扱いで、「御苦労さふ」と、音で言います。「おさらばさらば」で、三味線の調子は二本上がります。「母に別れて稚子が、父よと呼べばナナふり返り」チチチンチンチンチンのあたりは、三味線も良い手が付いていて、叙情的です。「又取直す勇声」と力強く。「幾重の思ひ浜ゆふが」も、叙情的。あとまた早く激しくなって三段目らしく終わる。ここらも四代清六師匠が鮮やかでした。

これで七十分。内容も充実してて、変化にも富み、やりがいのある大曲です。